

治承五年二月十二日鎮西より飛脚到来。「九州の者おかたのさぶらうども緒方三郎をはじめとして、臼杵うすき、戸次へつぎ、松浦党まつらとうにいたるまで、一向平家をそむいて、源氏に同心」のよし申したりければ、「東国北国のそむくだにあるに、こはいかに」とて、手をうってあさみあへり。(以上 飛脚到来)

そののち四国の兵つわものども、みな河野四郎かはのしろうにしたがひつく。熊野別当湛増も、平家重恩の身なりしが、それも叛いて源氏に同心の由聞こえけり。およそ東国北国ことごとく叛きぬ。南海西海かくのごとし。夷狄の蜂起耳を驚かし、逆乱の先表しきりに奏す。四夷忽ちに起れり。世はただ今失せなんずとて、必ず平家の一門ならねども、心ある人々の、歎き悲しまぬは無かりけり。

同じき二十三日公卿僉議あり。前右大将宗盛卿申されけるは、「坂東へ討手は向かうたりといへども、させるしいだしたる事も候はず。今度宗盛大將軍を承って、向かふべき」よし申されければ、諸卿色代しきたいして、「ゆゆしう候ひなん」と申されけり。公卿殿上人も、武官に備はり弓箭に携はらん人々は、宗盛卿を大將軍にて、東国北国の凶徒ら追討すべきよし仰せ下さる。

同じき二十七日前右大将宗盛卿、源氏追討のために東国へ既に門出と聞こえしが、入道相国違例の御心地とてとどまり給ひぬ。明るる二十八日より、重病をうけ給へりとして、京中、六波羅、「すはしつる事を」とぞささやきける。入道相国やまひつき給ひし日よりして、水をだに喉へも入れ給はず。身の内の熱きこと、火をたくがごとし。臥し給へる所四五間が内へ入る者は、熱さ耐へ難し。ただのたまふこととは、「あたあた」とばかりなり。すこしもただこととは見えざりけり。比叡山より千手井の水を汲みくだし石の舟にたたへて、それにおりて冷え給へば、水おびたたしくわきあがって、程なく湯にぞなりにける。もしや助かり給ふと箕の水をまかせたれば、石や鉄などの焼けたるやうに、水ほどばしって寄りつかず。おのづからあたる水は、ほむらとなって燃えければ、黒煙殿中に満ち満ちて、炎うづまいてあがりけり。

治承5年2月12日鎮西から飛脚到来。「九州の者どもは緒方三郎をはじめとして、臼杵、戸次、松浦党にいたるまで、すべて平家に叛いて、源氏に味方」ということを言ったので、「東国北国が叛いたことさえ大変なことなのに、どうすればよいの手をか」と手を打ち鳴らして驚きあった。

その後、四国の武士はみな河野四郎に従う。熊野別当湛増も平家から厚い恩顧をこうむっていたが、叛いて源氏に味方したと聞こえてきた。およそ東国北国はすべて叛いた。南海西海もこんなふうだ。夷狄（地方武士）の蜂起が人々を驚かせ、兵乱の前ぶれがしきりに報じられる。地方の反乱がたちまち起こった。世は今に滅びるだろうと、平家一門にかぎらず、心ある人々はみな嘆き悲しんだ。

同（1181年1月）23日公卿僉議がある。前右大将宗盛卿が「坂東へ追討軍を派遣しましたが、さしたる効果はありません。今度私が大將軍になって、向かうつもりです」と言ったところ、公卿たちは調子を合わせて「それは頼もしい」とお世辞を言った。公卿殿上人も、武官の職につき武芸に関わるような人々は、宗盛卿を大將軍にして、東国北国の凶徒を追討するよう命令が下った。

同27日、前右大将宗盛卿が源氏追討のため、いよいよ東国へ出発と言われていたが、入道相国清盛が病氣ということで取りやめになった。翌28日からは、清盛が重病にかかったといて、京中、六波羅の人が「ほら、やっぱりな」と密かに言い合った。（※清盛が、東大寺興福寺を焼いた報いを受けたと考えた）入道相国は発病した日から、水さえ喉を通らない。体が燃えるように熱い。寝所で8メートルぐらい近づくと、熱くて耐えられない。おっしやることは「あ痛た」ばかりである。全くただ事とは思えなかった。比叡山から千手井の水を汲んで来させ、石の舟に入れて体を冷やすと、水がはげしく沸きあがって、すぐに湯になってしまった。もしや助かるかと樋に水を流してかけるが、石や鉄などが焼けているように、水が飛び散って体にあたらない。たまたま体にかかった水は、炎となって燃えたので、黒煙が屋敷中に満ち満ちて、炎が渦巻いてあがった。

これや昔法蔵僧都といし人、閻王の請におもひて、母の生所を尋ねしに、閻王あはれみ給ひて、獄卒をあひそへて、焦熱地獄へつかはさる。鉄くろがねの門の内へさし入れば、流星たひやくゆなどのごとくに、炎空へたちあがり、多百由たひやくゆ旬じゆんに及びけんも、今こそ思ひ知られけれ。

入道相国の北の方、二位殿の夢に見給ひける事こそおそろしけれ。猛火のおびたたくもえたる車を、門の内へやり入れたり。前後に立ちたるものは、或いは馬の面のやうなるものもあり、或いは牛の面のやうなるものもあり。車の前には、無という文字ばかりぞ見えたる、鉄の札をぞ立てたりける。二位殿夢の心に、「あれはいつよりぞ」と御たづねあれば、「閻魔の庁より、平家太政入道殿の御迎ひに参って候ふ」と申す。「さてその札は何といふ札ぞ」と問はせ給へば、「南閻浮提金銅十六丈なんえんぶだいこんどうの盧遮那仏るしゃなぶつ焼きほろぼし給へる罪むけんによって、無間の底に墮ち給ふべきよし閻魔の庁に御さだめ候ふが、無間の無をば書かれて、間の字をばいまだ書かれぬなり」とぞ申しける。二位殿うちおどろき、汗水になり、これを人々に語り給へば、聞く人みな身の毛よだちけり。靈仏靈社に金銀七宝を投げ、馬鞍、鎧甲、弓矢、太刀、刀にいたるまで、取り出で運び出し祈られけれども、そのしるしもなかりけり。男女の君達あと枕にさしつどひて、いかにせんと歎き悲しみ給へども、かなふべしとも見えざりけり。

同じき閏二月二日、二位殿熱う耐へ難けれども、御枕の上に寄って、泣く泣くのたまひけるは、「御有様見奉るに、日にそへて頼み少なうこそ見えさせ給へ。この世におぼしめしおく事あらば、すこしもののおぼえさせ給ふ時、仰せおけ」とぞのたまひける。入道相国、さしも日ごろはゆゆしげにおはせしかども、まことに苦しげにて、息の下にのたまひけるは、「われ保元、平治よりこのかた、度々の朝敵をたひらげ、勸賞身にあまり、かたじけなくも帝祖、太政大臣にいたり、栄花子孫に及ぶ。今生の望み一事ものこる処なし。ただし思ひおく事とては、伊豆国の流人、前兵衛佐頼朝が頸を見ざりつるこそ

昔、法蔵僧都という人が、閻王の招きでかけて、亡母の居場所を尋ねたとき、閻王があわれに思い、獄卒をつけて焦熱地獄へいかせた。鉄の門の中に入ると、流星などのように、炎が立ち上がって数百キロの高さに及んだという話が、今になって理解できた。

入道相国の北の方、二位殿が夢に見たことがおそろしかった。火が激しく燃えている車を、門の内へ入れている。前後に立っているものは、一方に馬の面のようなもの、もう一方には牛の面のようなものがある。車の前には、無という文字だけが書かれている鉄の札を立てていた。二位殿は夢の中で、「どこから来たの」と尋ねたところ、「閻魔の庁から、平家太政入道殿のお迎えにまいりました」と言う。「それはなんの札」と聞くと、「南閻浮提金銅十六丈の盧遮那仏を焼きほろぼした罪によって無間地獄に墮ちると閻魔の庁で決定しましたが、無間の無の字だけ書いて、間の字はまだ書いていません」と言った。二位殿ははっと目を覚まし、汗をびっしょりかいて、このことを人々に語ると、聞く人はみな身の毛がよだつた。靈仏靈社に金銀七宝を投げ、馬鞍、鎧甲、弓矢、太刀、刀にいたるまで、取り出し運び出し祈ったが、その効果も無かった。平家の若君や姫君が清盛の足もとと枕もとに集まって、どうしようと嘆き悲しんだが何もできそうになかった。

同年閏2月2日、二位殿は熱くて耐へられなかったが、枕のそばに寄って、泣きながら「ご様子を見ると、日に日に回復の望みが無くなるようです。言い遺すことがあれば、すこし正気が残っているうちにおっしゃってください」と言った。入道相国は、平生は立派にふるまっていたが、ほんとうに苦しうで、苦しい息の下で「わしは保元、平治の乱以来、何度も朝敵を平らげ、身に余る官位や所領をいただき、おそれおおくも帝の外祖父、太政大臣になり、栄花は子孫に及んだ。今生の望みはすべて叶った。ただ思い残すことは、伊豆国の流人、前兵衛佐頼朝のくびを見なかったことで、これがまんならない。

やすからね。われいかにもなりなん後は、堂塔をもたて孝養をもすべからず。やがて討手をつかはし、頼朝が首をはねて、わが墓のまへに懸くべし。それぞ孝養にてあらんずる」とのたまひけるこそ罪深けれ。

同じき四日病にせめられ、せめての事に板に水を沃て、それにふしまろび給へども、たすかる心地もし給はず、悶絶躡地して遂にあつち死ぞし給ひける。馬、車の馳せちがふ音、天もひびき大地もゆるぐ程なり。一天の君万乗の主の、いかなる御事ましますとも、これには過ぎじとぞ見えし。今年は六十四にぞなり給ふ。老死といふべきにはあらねども、宿運たちまちに尽き給へば、大法秘法の効験もなく、神明三宝の威光も消え、諸天も擁護し給はず。況んや凡慮においてをや。命にかはり身にかはらんと、忠を存ぜし数万の軍旅は、堂上堂下に並み居たれども、これは目にも見えず力にもかかはらぬ無常の殺鬼をば、暫時も戦ひかへさず。またかへり来ぬ死出の山、三瀬河、黄泉中有の旅の空に、ただ一所こそおもむき給ひけめ。日ごろつくりおかれし罪業ばかりや獄卒となって、迎へに来りけん。あはれなりし事どもなり。

さてもあるべきならねば、同じき七日、愛宕にて煙になし奉り、骨をば円実法眼頸にかけ、摂津国へくだり、経の島にぞをさめける。さしも日本一州に名をあげ、威をふるっし人なれども、身はひとときの煙となって、都の空に立ちのぼり、かばねはしばしやすらひて、浜の砂にたはぶれつつ、むなしき土とぞなり給ふ。

わしが死んでしまった後は、堂塔を建てたり供養をしてはならない。ただちに追討軍を派遣し、頼朝の首をはねて、わが墓の前に懸けよ。それこそが供養だ」と言うのはほんとうに罪深い。

同4日、病に苦しめられ、せめてものこととして板に水をかけて、その上で転がったが、助かる望みはなく、苦しみ悶えてあつち死をした。馬や牛車が行き交う音は、天も響き大地も揺れるほどである。帝や一院に、なにかあっても、これほどではあるまいと思えた。清盛は今年64歳になる。老死というのは適當ではないが、宿運がたちまち尽きたので、大法秘法の効験もなく、神明三宝の威光も消え、諸天も守護しなかった。ましてや人間には何もできない。自分の命と引き替えに身代わりになろうと、忠誠を尽くす数万の軍兵は、堂上堂下に並んでいたけれど、軍兵は、目には見えず力も及ばない死という殺鬼を、戦って退けることはない。清盛は二度と帰らない死出の山、三瀬河、黄泉中有の旅の空に、たった一人で旅立つ。日ごろ作った罪業だけが獄卒となって、迎へに来たのだろうか。いたましいことである。

そのままにはできないので、同七日、愛宕で火葬し、遺骨を円実法眼が首にかけ、摂津国に行き、経の島に納めた。日本中に名をあげ、権力をふるった人だったが、身はひとときの煙となって、都の空に立ちのぼり、骨はしばしとどまって、浜の砂に混じり、空しく土に変わる。